

Goulven Madec: *La Patrie et la voie. Le Christ dans  
la vie et la pensée de St. Augustin.*

Desclée De Brouwer, 1989, 349p.

加藤 武

1: アウグスティヌス生誕 1600 年を記念してローマで国際学会がもたれたとき、アウグスティヌス研究にとり、大きなひとつの輝かしい時代の幕明けを意味した。伝統的なドグマによりかかろうとする安易な傾向を排し、古典文献学的方法を武器として、つぎつぎに豊かな研究の成果が発表されて今日に及んでいる。クルセル、マルー、ペパン、アドー、フォンテース、アンリなどはその代表的な学者に属する。あるひとはこれをパリ学派と呼んだ。あれから三〇年の月日が流れた。アウグスティヌス回心 1600 年を記念して、ふたたび国際学会がローマのアウグスティヌス研究所で開かれたとき、思いきや、早くも保守化への後退の気運が、濃厚に見られたのである。マンドゥーズが、学会のコーヒー・ブレイクのうちに、「アウグスティヌスは屍ではない。アウグスティヌスは今も生きている！」と悲痛な叫びを、痛烈な皮肉に託して、漏らした場面を忘れることができない。

マデックのこの度の新著を繙くとき、こうした欧州を覆うかに見える暗雲の影にもかかわらず、依然として、燦然たる太陽のかがやきが、木漏れ日のように、さしこんでいるのを見る喜びを覚えずにはおられない。これは故クルセルらの世代につづく、次の世代を代表する研究段階のひとつの姿を、よく示している。マデックは、これまで多年にわたって、フォリエ神父のもとで「エチュード・オーギュスティニエンヌ」誌の編集に携わり、パリのカトリック大学教授、高等研究所の講座をもち、科学研究所員として活躍している。おそらく世界中で、かれほどに、アウグスティヌス学（そういう言葉があるかどうかしらないが）に精通している学者は、まずみあたらないであろう。ときに、論争においてなかなかの闘士ぶりを発揮するが、同時に、アウグスティヌスの膨大な著作を、広範囲に、しかも正確に、発掘する力量においてすぐれている。

## 2: この書物の特色

その第一は、そのテーマの設定にある。それを《パトリアと道》という標題がよく示している。すなわち、本書の目的は「キリストがその生涯とその思想において占める位置を全体として示すことにある」(p. 15) だからといって、ここに、いわゆるキリスト論を求めるのは早計である。「そうしたものは、私の望むことではない。神・論とか、キリスト・論を立てると、アウグスティヌスの思想がどうしても貧弱なものになるからである。キリストについての彼の思想、それは、かれの霊的な生活の全体が示している。彼の、個人としての、また共同にもつ、キリスト経験なのである」(p. 15)

この書物を繙くときに気づく第二の特色は、一見異様に思われるほどの、おびただしいアウグスティヌスの著作からの引用である。引用が本文を量的に凌駕する！けれども、それは、しばしば著者ならではの読書力によって発掘されたばかりの鉱石なのである。われわれはこの豊富な引用を優れた道案内として、未知の森へと、わけ入ることができるであろう。

この書物は三部からなる。

第一部は《回心》という標題をもち、アウグスティヌスの個人的な経験のなかに、《キリストの占める位置》を探ろうとする。

第二部は《典礼》という標題をもち、教会生活におけるキリストの位置をしめす。

第三部は《問題》という標題をもち、さまざまな論争に巻き込まれる中で、キリストへの省察がいかに深められていったかを示す。

## 3: 第一部 回 心

その稚い日から、生涯を閉じるまで、キリストの名は、アウグスティヌスとともにあった。キケロの『ホルテンシウス』を読んで、《知恵》への、魂の大なる転回を経験したけれども、《キリストの名》が、そこにみあたらないことにいたく失望したことは、いかに彼の魂の底深く、キリストの名が錘のように置かれていたかを、よく示している。それではマニ教の泥沼のなかに、九年の長きにわたって沈みこんだときは、どうであったか。「キリスト教会から離れたことはたしかあるとしても、キリストから離れたのではない」(p. 28)。アウグスティヌスは三位一体の神、キリストへの信仰告白を、マニ教の經典のなかにみいだしていた。《パトリアと道》を記す箇所(『告白』第七巻、第二部は、(キリストをめぐる最も重要なテキストであり、マデック教

授の分析も精細を極める。386年春、「新プラトン派の書物」を読んで、まことの神の存在を深く経験する。「ここで重要なことは、書物の知識でなく、極度に凝集された個人的な生の生きた経験なのである (p. 38)。しかし、インデ・アモニートゥスの一節の帯びる意味は、樋笠勝士の最近指摘するところであり、解釈学の視点から、再考の余地がある、と思われる。アウグスティヌスはさらに進んで言う。「あなたを喜ぶ力を得ることができるようになるために、わたしは道を求めました。でも、みいだしませんでした」。道とは、神と人の中間を占める人としてのイエス・キリストを指す。しかし、この時期のアウグスティヌスは、イエスを、たかだか優れた人物としてしか、みることができない。それでは、このことは、キリストへの信仰から遠く離れていたことを示すのだろうか。そうではない。マデックは、信仰のレベルと理解のレベルを厳密に区別する。これは理解のレベルでの反省なのである。アウグスティヌスは、新プラトン派のヌースとヨハネ福音書の冒頭のロゴスが完全に一致することを見出した。それでは、一見、キリスト教的な色彩をもつ表現に欠けていると見られるカッシアタムの時期は、どうであろうか。マデックはいう。「『コントラ・アカデミコス』, III, 19, 42-20, 43 は、コトバの受肉のドグマを、新プラトン派の用語で置き換えたにすぎない」(p. 54)。387年4月24-25日に洗礼を受けたアウグスティヌスは、信仰において子供になった。けれども、乳を飲んでいる時期から「天使のパン」によって養われる迄に、成長しなければならない。従来、このような霊的な側面に、光が当てられることが乏しくあったことに警鐘を鳴らす。この面からの『教師論』への言及、特に『真の宗教』の詳しい分析は興味深い。

## 第二部 典 礼

391年には、ヒッポの教会の司祭、395年には、司教になったアウグスティヌスは司教アウレリウスと仕事を分担していたであろう。アウレリウスは実務に、かれは理論に、この推定は可能である。かれは信徒とともに毎日聖餐にあづかった。典礼の集まりは、テオ・ロジーの場ではない。それは、キリスト・ロジーの場であった。カテシストが退場したあと、信徒だけが残り、聖餐において、キリストの身体との合体がおこなわれる。人はここに、象徴か、化体か、の論争を思い起こすであろう。「しかし、アウグスティヌスにとり、とくにシンボルは sacramentum であり、mysterium であったのである」(p. 109)。それではコトバの典礼においてはどうであったのだろうか。アウグスティヌスは実に 8000 回におよぶ説教をした。のこっているのは 546 篇しか

ないが、聖書のどこをたたいてもキリストの音がする。その基調はいつもかわらない。

ad Illum imus,  
per Illum imus,  
non perimus

われはわれ信仰から理解へと進まねばならない。「キリストは信仰によって、……養い、観想によってわれらを皆、天使と等しくする」。(『自由意志論』III, 10, 29-30)ここに新プラトン主義への依存があることを否定できない。キリストは個人の経験にのみ属するのではない。キリストは教会の首、教会はその身体である。この点の理解にあたってテュコニウスの規則第一「主とその身体について」が支えとなっている。

### 第三部 問 題

かれの思想は、しばしば、さまざまな論争にまきこまれ、たえず信徒や司教らからの、多岐を極める質問に答えなければならないさし迫った外的事情からうまれた。それは彼の思想を深める結果になった。

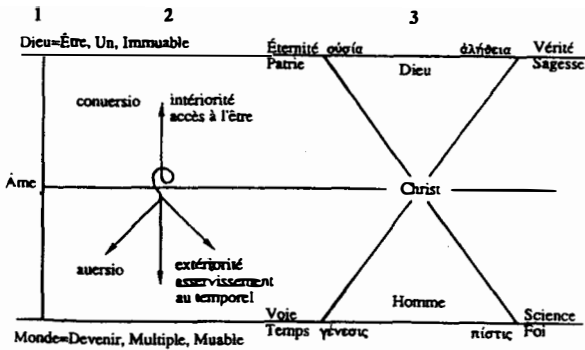
キリストは愛の王国を建設した。われわれは自分のものを求めるのでなく、イエス・キリストに属するものを求めなければならない。この《自分のもの》と《共通のもの》というテーマは、アウグスティヌスのメッセージの中心的なトポスとなっている。それは修道会則の第八、一の基礎をなしている。

マニ教とグノーシスの優れた研究者、ミシェル・タルディユは、マニ教徒の新約聖書解釈は今日の《文学批評》程科学的ではないにしても、それと共通するものをもっていると見る。これにたいして、マデックは、かれらは新約聖書を否定する結果、《空想のキリスト》をでっちあげる結果に終わった (p. 251) と、反論を加えている。ドナティスト、ペラギウス派、異教徒、ユダヤ教徒などへの批判の根底にある一貫した通奏低音は、受肉したキリストの受容にある。

### 4 ダイアグラム：

これまでの理論を、最後に図解によって説明を試みている (p. 289)。

## Diagramme



## イエス～信仰

アウグスティヌスは、このような階層的な世界像を描いていた。これは、ヘノロジーというよりも、オントロジーに属する。この着想を、かれは新プラトン派の書物から得た。マデックは、アウグスティヌスは、ポルヒュリオスから学んだと見る。それはとりわけ、魂としての人間をメーセー・ウシアとしてみるアントロポロジーによる (p. 291; p. 303)。

本書は新鮮な視点を提供する。それをマデックは従来 of 額縁のなかに収めるのではなく、自由な大空のキャンパスに、大胆に、しかも、厳密に、スケッチした。われわれはさらに、これをてがかりに、同一性の、一層、根源的な自由な思索による彫塑へと赴かなければならないであろう。

Édouard Jeuneau: *Études Érigéniennes*.

*Études Augustiniennes*, Paris 1987. 749p.

今 義 博

およそ十年前の1980年にはエリウゲナ研究の状況は例えば次のように述べられていた。「ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナは、その思想がもつ並外れた高邁さと深淵